慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究 : I
Sub Title	An experimental inquiry into the handwriting correlates of three personality types : I
Author	槇田, 仁(Makita, Hitoshi) 小谷津, 孝明(Koyazu, Takaaki) 伊藤, 隆一(Ito, Ryuichi) 渡辺, 利夫(Watanabe, Toshio) 平野, 学(Hirano, Manabu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1981
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.21 (1981.) ,p.85- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000021-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究—I[1]

An Experimental Inquiry into the Handwriting Correlates of Three Personality Types—I

槇田　仁
Hitoshi Makita
小谷津孝明
Takaaki Koyazu
伊藤隆一
Ryuichi Itoh
渡辺利夫
Toshio Watanabe
平野　学
Manabu Hirano

Based on Kretschmer's three-type theory and Sheldon's, we attempt to carry out a series of experiments on the relationship between constitution and personality, using handwritings in Japanese (a quarter part of responses on SEIKEN-SHIKI Sentence Completion Test) as the index of constitution. This paper is the first report.

In Experiment I-1, the character of handwriting was quantitatively examined. The dissimilarity in every pair of 90 handwritings (4005 pairs) was rated by 29 persons on 9 grades' rating scale. From those correlation coefficients, using the principal component analysis and the varimax rotation, we factorized as follows, i) the coping handwriting, ii) the largeness of letters, iii) the powerfulness of the writing, iv) the smoothness of the pen, and so on.

In Experiment I-2, the character of handwriting was qualitatively examined. 30 raters freely wrote the features of 60 handwritings. By the content analysis, those descriptions were analyzed, and the large check list which included 71 distinctive items (words or phrases) to illustrate all handwritings in Japanese was constructed.

Both results in Experiment I showed that factors in Experiment I-1 almost corresponded to the features of Kretschmer's theory and Sheldon's.

序

筆跡に関する観察は，ヨーロッパにおいては，遠くローマ時代にまでさかのぼることができる。しかし，体系的・本格的研究が行なわれるには19世紀を待たねばならなかった。当時ヨーロッパにおいては，筆跡学 (Graphology；筆相学，筆勢学とも言う) の名をつくり，その父とも呼ばれる Michon (1875) や，その弟子 Crépieux-Jamin (1885) らによるフランス学派，並びに Preyer (1894) をはじめとするドイツ学派の研究が有名であった。やがて20世紀に入ると，その研究も Klages (1929) の如く哲学的（面相学的，相貌学的）立場をとるものと，Saudeck (1925) の如く実証的（精密科学的，自然科学的）立場をとるものとに，より明確に分かれていった。しかしこれらはまだ純粋に〝筆跡〟のみの専門家，即ち筆相学者によるものであり，理論的体系としては不十分なものであった。

こうした状況の下，心理学者，特に実験心理学者も徐々に筆跡に注目するようになり，Hull and Montgomery (1919), Allport and Vernon (1933), Middleton (1939), McNeil and Blum (1952) らによる実験的手法による研究が進められていった。また，性格心理学の立場からも，Kretschmer (1925), Enke (1930), Steinwachs (1952) らの，身体類型との関連で筆跡を考える研究が発表されていった。

さて，このように西洋では古くから筆跡学が成立・発展していったが，中国及び日本ではほとんどそれに匹敵するものが見当らない。〝書〟をむしろ〝芸術〟という気品あるものとして尊び，科学的メスを入れることを拒んできたこととも，それは無縁ではあるまい。日本にお

いては，呉（1892）や松本ら（1916）の研究が最初のものとされているが，以後，広島大学では，三好らによって，主に書字作用研究と装置開発が進められてきた（村瀬・三好,1955；三好・小林,1963 など）。また，筆跡のもつ実用性という観点から科学警察研究所では，筆圧に関する研究（金沢ら，1958；町田・山下，1959，1960），また鑑定に関する研究（町田・今村，1960）などの基礎的研究が続けられている。さらに最近では，黒田(1964，1966)，町田（1961，1969），また，町田がペンネームで執筆した町野（1978）らの一連の著作や谷山（1979）の研究などがあるが，これらは経験的知識をまとめたものも多く，厳密な意味での包括的・実証的筆跡研究とは言いがたい。[2)]

Allport (1961) はパーソナリティ評価のための方法の1つとして表出行動法をあげている。表出行動とは，個人の話し方，顔の表情，筆跡，姿勢，身振りなど，「ある人の適応的動作を遂行する仕方」(Allport (1961)，第19章）と定義することができる。従って，この方法は行為の内容には関係なく，ただその仕方を観察することによって，個人のパーソナリティ諸特性を間接的に探究するものと言える。こうした立場では，人の行なうあらゆる行為はすべて表出的側面と対処的（適応的）側面をあわせもっており，時と場面に応じてそのどちらかがより多く現われるものと考える。そして，「ある行為の特定の意図，意識的統制，対処のために用いられた習慣とか手法を越えたところを見る」(Allport (1961)，第19章）ことによって，表出行動の個性を識別しようとする。

Allport and Vernon (1933) は表出行動法の対象の1つとして筆跡にも関心を示し，いくつかの実験的研究を行ない，筆跡が書き手の性質をかなりよく反映するものであることを明らかにしている。また，Preyer (1894) は，筆跡というものが「単なる〝筆跡〟であることにとどまらず，手の対処運動に個性的な趣きを添える，表出のためのあらゆる神経的刺激によって影響された〝脳跡〟である」と主張して，筆跡のもつ理論的，および研究方法上の利点を説いている。しかし，こうした古くからの指摘にもかかわらず，すでに述べたように，筆跡に関する研究は，それらの多くがいわゆる古典的筆跡学研究とも言うべきものであり，実証的研究とは仲々言いがたい。ある程度科学的研究の色彩をおびたものも主に鑑定に関するものが多い。

一方，筆跡とパーソナリティの関係についての直接的・実証的研究についても，Kretschmer (1925)，Enke (1930)，Steinwachs (1952) らの筆圧に関する研究など，少数に限られる。

こうした状況の下，佐野・槇田（1960）は「精研式文章完成法テスト（ＳＣＴ）」を開発し，これを用いたパーソナリティ研究を続けてきたが，槇田はその中で，経験的に筆跡と書き手の性格類型との関連に気づいた。具体的にはＺの筆跡は，丸味，やわらかみ，筆圧のアクセント，筆圧の弱さなどの特徴を，Ｓの筆跡は，小さく，くずれた字，筆圧の弱さなどの特徴を，Ｅの筆跡は，筆圧が強く，一定で，大きく，一字一字独立の字といった特徴を示す。これを実証的に研究し，さらにＳＣＴによるパーソナリティ診断に応用できないものか，と考えたものである。また，小谷津は〝パターン認識〟の研究の1つとして筆跡研究に注目し，筆跡という文字パターンの認知のされ方，すなわち視覚情報の特徴抽出機構に興味を寄せていた。そこで，本研究では厳密な実験心理学的手法を用いて筆跡とパーソナリティの関係についての研究を行ない，科学的検証に耐え得るものを目指しつつ，その応用としてパーソナリティ診断法の開発を意図している。具体的には，

i) 筆跡を主成分分析や判別分析などの技法によって解析し，同時に各筆跡の書き手のパーソナリティを診断し，両者の関係をみる。

ii) 評定者（実験に参加し，筆跡を色々に評定する者）の訓練可能性，および評定者自身のパーソナリティと評定結果の偏りとの関連について検討する。

iii) さらに，それらの結果をパーソナリティ診断の一道具として活用し，公共的・実用的なものとする。

の3点を目的として，「精研式ＳＣＴ」の反応の筆跡を刺激とし，また，Kretschmer, Sheldon の3類型にヒステリーと神経質を加えたパーソナリティの5類型，即ちＺ・Ｓ・Ｅ・Ｈ・Ｎ（佐野・槇田，1960）をパーソナリティ診断の指標として，一連の実験的研究を行なうことにした。ＳＣＴの反応を筆跡材料として用いることは，そのまま同じ材料からパーソナリティ診断が可能な点で，また筆跡による新しいパーソナリティ診断法の実用化への平易さの点で，二重に利点をもっているように思われる。

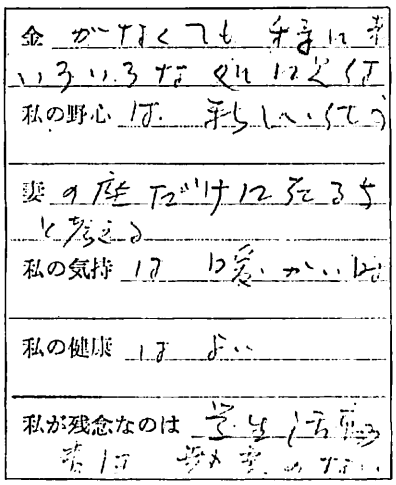
本報告は，一連の実験的研究の第1報として，

i) 日本語の筆跡の種類とその特徴について検討する。

ii) それらと書き手のパーソナリティとの関連について大まかな把握をめざす。

の2点を目的として行なわれた「実験Ｉ」の内容と結果について述べたものである。

No. 5



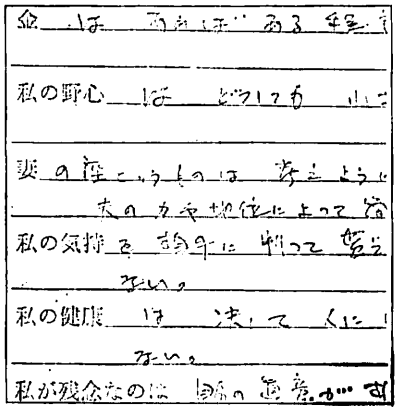
形態パタンカード

大きい	22
くずし字多い	17
筆圧弱い	15
丸味あり	9
曲線的	8

情緒パタンカード

きたない	16
おおらか	11
善良	9
雑	9
大胆	5
おおまか	5
だらしない	5

No. 35



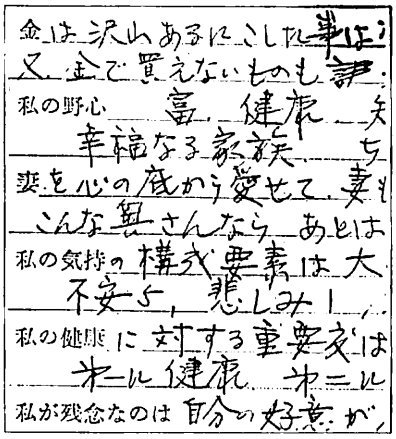
形態パタンカード

小さい	28
細い	16
字間が広い	7
一字一字独立	7
筆圧弱い	6
つづけ字	6

情緒パタンカード

いじけ	11
神経質	9
不快	8
小さい	5
気が小さい	5
雑	5
ひよわ	5
読みにくい	5

No 56



形態パタンカード

筆圧強い	21
大きい	21
勢いのある字	10
直線的	7
太い	5
規則的	5
鋭角的	5

情緒パタンカード

たくましい	18
エネルギッシュ	12
活動的	10
高圧的	8
好感がもてる	7

図1　筆跡と，その特徴を記したパタンカード。筆跡は，各々の刺激の一部を約 2/3 の大きさに縮小したものが示されている。No. 5 はZの筆跡，No. 35 はSのそれ，No. 56 は E のそれを示す。形態・情緒パタンカードについては，実験Ⅰ－2の結果の項参照のこと。ただし，各パタンカード右端の数字はそれぞれの特徴項目の出現度数を示す。最高得点は評定者数30と一致するはずである。

実　験　I—1

目　的

筆跡とパーソナリティとの関連を数量的技法によって検証する。

刺　激

「精研式ＳＣＴ」の４ページ目（4/4）の反応の筆跡のコピーが刺激として用いられた。反応は，筆記具も，字数も，形式も，内容も様々であるが，コピーが概ね実物の反応の筆跡の特徴を反映することは，あらかじめ確かめられた。筆跡は，槇田の手元のストック及び新たに集められたＳＣＴ，合計約5000ケースの中から，日本人の日本語の筆跡を網羅するように考慮し，また，主成分分析に使用するコンピュータの容量や評定者の作業量も考えると90ケース程度選択することが適当と思われたので，佐野・槇田(1960)の５類型もある程度考慮するようにしてあらかじめ便宜的に表１に示された30の筆跡類型を考え，その各々に少しずつ異なる３種の筆跡を入れることによって，90ケースの筆跡が準備された。ただし，表１の筆跡類型中，「Ｚ」から「Ｚ or Ｓ」まで８つはＺの筆跡類型であることを，「Ｓ１」から「ＳＥＨＮ」まで９つはＳのそれであることを，そして「Ｅ」から「Ｅ特３」まで12の筆跡類型はＥのそれであることを示している。図１には用意された筆跡の一部が載せられている。No. 5 はＺの筆跡を，No. 35 はＳのそれを，No. 56 はＥのそれを示している。なお，書き手のパーソナリティはＳＣＴその他の材料から槇田が診断した。

手続き

29名の大学生を中心とする評定者に，90ケースの筆跡から各々１対ずつ取り出したすべての組合せ，計4005対について，９段階の評定尺度を用いてその相違度を評定させた。得られたスコアを５段階の類似尺度値に再編成して，各筆跡間の相関係数にあたるもの（分散を１と仮定すれば，２変数間の距離ｄと各々のベクトルのなす角 θ との関係は $\cos\theta=1-d^2$ で表わされる。そこで $1-d^2$ の値を相関係数とした。）を算出し，主成分分析によって因子を決定し，バリマックス回転を行なって因子を抽出した。因子の決定に際しては，Kretschmer, Sheldon の３類型に対応するよう仮定された仮説的因子数３を基準とし，さらに主成分分析の固有値の落差にも矛盾をきたさぬよう配慮した。

主成分分析は以下に示す４種のデータを用いて行なわれた。

(1)　Ｚ・Ｓ・Ｅ　24刺激；得られたデータの中から，Ｚ・Ｓ・Ｅ各々に特徴的な筆跡８つずつ，計24筆跡についての24×24の相関行列のみを取り出して，主成分分析を行なった。

(2)　$\overline{H}\cdot\overline{N}$　21刺激；得られたデータの中から，ＨやＮのほとんどみられない21筆跡間の相関係数のみを取り出して，主成分分析を行なった。

(3)　特落ち　72刺激；表１に示された筆跡類型中，Ｚ特，Ｚ or Ｓ，Ｅ特１～３，Ｐ に該当する特殊な18筆跡についてのデータを除いた，72×72の相関行列を用いて，主成分分析を行なった。

(4)　90刺激；全データ，即ち90×90の相関行列を用いて，主成分分析を行なった。

結　果

(1)　Ｚ・Ｓ・Ｅ　24刺激；主成分分析の結果得られた固有値は第Ⅶ因子まで図２に示されたような値を示し

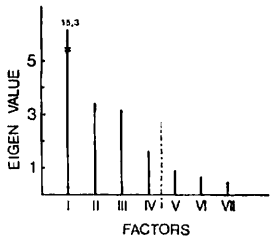


図２　「(1) Ｚ・Ｓ・Ｅ　24刺激」のケースにおける，主成分分析で得られた固有値の推移。データは第Ⅶ因子までの固有値の推移を示している。

表１　便宜的に考えられた30種の筆跡類型

Ｚ	ＺＨ１	ＺＨ２	ＺＥ	ＺＥＨ１	ＺＥＨ２	Ｚ特	Ｚ or Ｓ
Ｓ１	Ｓ２	ＳＨ	ＳＥ	ＳＥＨ	ＳＮ	ＳＥＮ	ＳＨＮ
ＳＥＨＮ	Ｅ	ＥＨ１	ＥＨ２	ＥＨ３	ＥＳ	ＥＳＨ１	ＥＳＨ２
ＥＺ	ＥＺＨ	Ｅ特１	Ｅ特２	Ｅ特３	Ｐ		

（ただし，特：特殊，Ｐ：異常）

ていた。第Ⅳ因子までの累積寄与率が97.2%を示し，また第Ⅳ因子と第Ⅴ因子間で固有値に落差がみられたので，このデータから抽出される因子数は4と考え，第Ⅳ因子までをバリマックス回転にかけて軸の回転を行なった。図3はその結果得られた各変量(筆跡刺激)の第Ⅰ～第Ⅲ因子における負荷量を示している。負荷量をもとに各因子を推定した結果，各々の因子は以下のように推定された。ただし，以下いずれのケースにおいても，(　)内の数字は寄与率を示している。

第Ⅰ因子（39.1%）：対処軸（負荷量が－1に近づくに従って，やわらかい，勢いのない，まとまりのない字となる。）

第Ⅱ因子（25.4%）：筆の運びの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，活字風の，一字一字独立した筆跡になる。）

第Ⅲ因子（24.3%）：大きさの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，小さな，勢いのない筆跡を示す。）

第Ⅳ因子（8.4%）：筆勢の軸（負荷量が－1に近づくに従って，ハネのない，おとなしい字になる。）

また，図3からも明らかな通り，第Ⅰ因子は概ねZの筆跡類型に属する筆跡を説明し，第Ⅱ因子は概ねEの筆跡を，また第Ⅲ因子は概ねSの筆跡を説明していることがわかった。

(2)　$\overline{H}\cdot\overline{N}$　21刺激；(1)のケースと同様の方法で抽出された因子数は3であった（累積寄与率94.3%）。図4にバリマックス回転後の各々の筆跡の各因子における負荷量を示す。負荷量をもとに各因子を推定した結果，各々の因子は以下のように推定された。

第Ⅰ因子（30.7%）：大きさの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，小さな筆跡となる。）

第Ⅱ因子（25.3%）：筆の運びの軸（負荷量が－1に近づくに従って，一字一字独立で，見やすい筆跡となる。）

第Ⅲ因子（38.3%）：対処軸（負荷量が＋1に近づくに従って，書きなぐりの，きたない字となる。）

ここでは，(1)の結果とは異なり，1つの因子のみで説明のつく筆跡類型は第Ⅰ因子とSの関係のみで，EとZの筆跡は第Ⅱ，第Ⅲ因子と複雑に関連しているように見える。(1)と(2)のケースで使用された筆跡を比較してみると，この結果の差は，評定者に弁別できるのがEとZの筆跡類型間ではなく，EHとZの筆跡類型間である点に帰因しているように思われる。事実，図1に示されたNo.56の筆跡は，Eの筆跡とはいえ，実際にはハネのめだつEHの筆跡類型に属している。純粋のEの筆跡は，力強く，角ばってはいるが，かなり乱雑な，Zに似た筆跡を示すことも多い。

(3)　特落ち　72刺激；このケースでは4つの因子が抽出された（累積寄与率94.7%）。図5，図6にバリマックス回転後の各々の筆跡の各因子における負荷量を示す。負荷量をもとに各因子を推定した結果，各々の因子は以下のように推定された。

第Ⅰ因子（34.3%）：対処軸（負荷量が＋1に近づくに従って，雑な，書きなぐりの筆跡となる。）

第Ⅱ因子（29.5%）：大きさの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，小さな筆跡となる。）

第Ⅲ因子（17.9%）：筆勢の軸（負荷量が－1に近づくに従って，ハネの大きな，勢いのある字を示す。）

第Ⅳ因子（13.0%）：筆の運びの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，一字一字独立の筆跡となる。）

このケースでも，前回同様，Sの筆跡とその他の筆跡との分離がみられた。第Ⅱ因子がSの筆跡を説明し，その他の因子が複雑に相互関連してE，Zの筆跡を説明しているようにみえる。

(4)　90刺激；このケースでは5つの因子が抽出された（累積寄与率92.4%）。図7，図8にバリマックス回転後の各々の筆跡の第Ⅳ因子までの負荷量を示す。負荷量をもとに各因子を推定した結果，意味不明の第Ⅴ因子（寄与率13.8%）を除いて，各因子は各々以下のように推定された。

第Ⅰ因子（30.8%）：対処軸（負荷量が＋1に近づくに従って，読みにくい字となる。）

第Ⅱ因子（26.0%）：大きさの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，小さな筆跡を示す。）

第Ⅲ因子（10.3%）：エネルギーの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，力強い，エネルギッシュな筆跡となる。）

第Ⅳ因子（11.5%）：筆の運びの軸（負荷量が＋1に近づくに従って，一字一字独立の字を示す。）

このケースでは，第Ⅱ因子がSの筆跡を説明し，第Ⅲ因子がEの筆跡を説明しているようにみえるが，Zの筆跡を説明する因子を確定することはできなかった。また，ここでは，変量数が多く，特殊な筆跡が加えられているためか，コミュナリティが低く，抽出された因子によっては説明できない変量も，E，Zの筆跡に少数みられた。

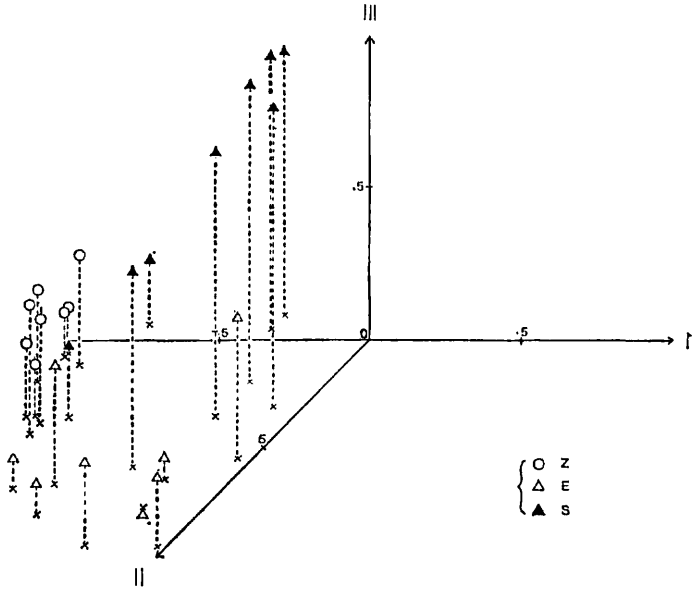


図3 「(1) Z・S・E 24刺激」の布置（第Ⅰ～第Ⅲ因子)。データはバリマックス回転後の各変量（筆跡刺激）の負荷量を示す。ただし，○で示された筆跡はZの筆跡類型に属することを，△はEのそれ，▲はSのそれであることを示している。また，×は各変量の水平面における座標を，……は各変量の垂直軸の値を示している。以上は図3～図8に共通である。

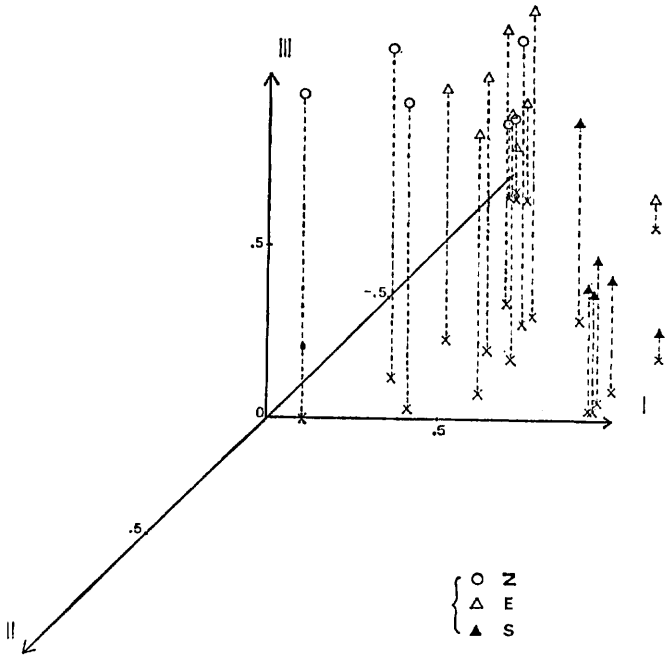


図4 「(2) $\overline{\mathrm{II}}$・$\overline{\mathrm{N}}$ 21刺激」の布置（第Ⅰ～第Ⅲ因子)。

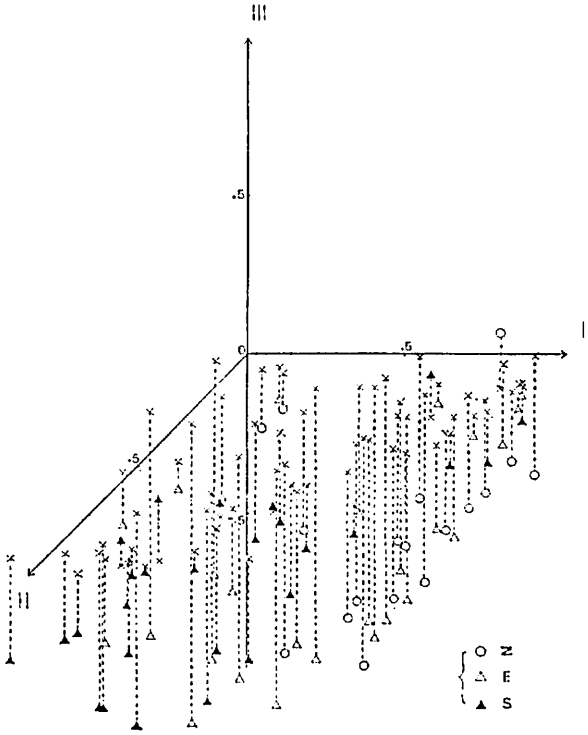


図5 「(3) 特落ち 72刺激」の布置（第Ⅰ～第Ⅲ因子）。

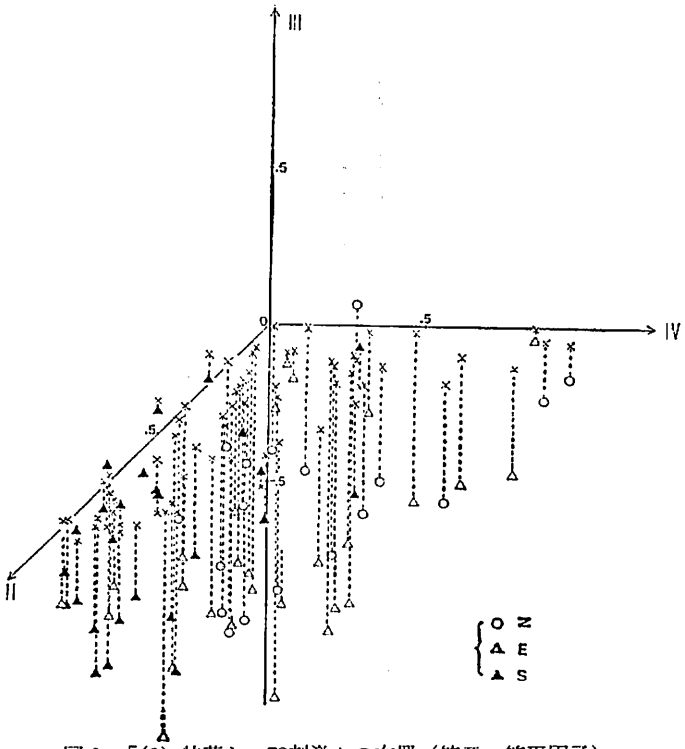


図6 「(3) 特落ち 72刺激」の布置（第Ⅱ～第Ⅳ因子）。

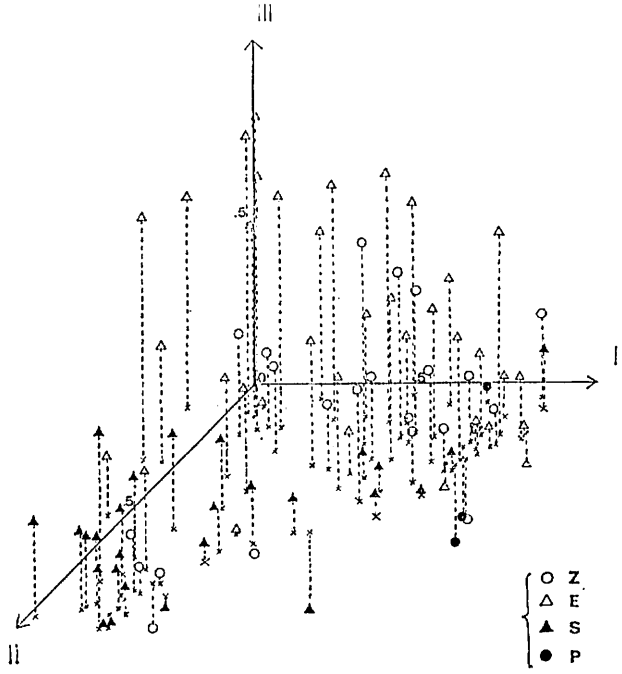


図 7 「(4) 90刺激」の布置（第Ⅰ～第Ⅲ因子）。

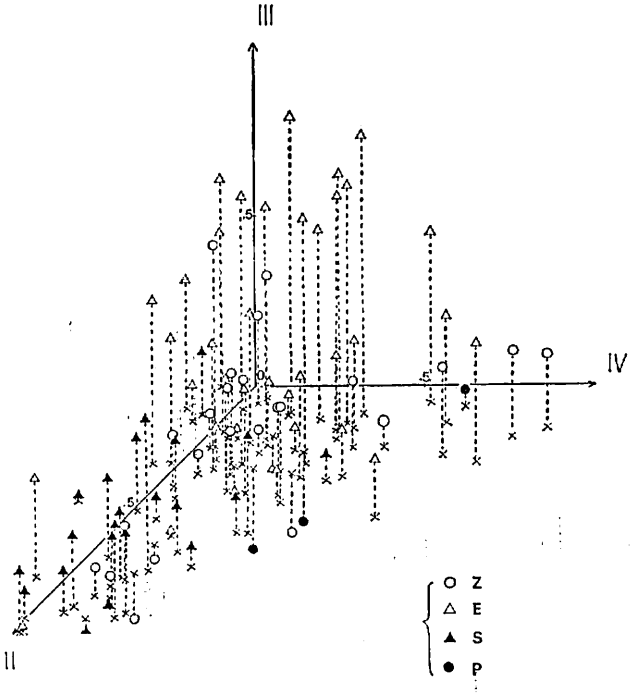


図 8 「(4) 90刺激」の布置（第Ⅱ～第Ⅳ因子）。

(1)〜(4)のケースを総合してみると，いずれのケースにおいても類似の因子が抽出されていることがわかる。特に対処軸と推定された因子は常に寄与率が高く，評定者はまず第一に筆跡を読みやすさで評定していることがうかがわれる。しかし，対処因子は，筆跡でパーソナリティを診断しようとする時にはあまり有効な働きをしてはいないようである。この結果から見る限り，Ｓの筆跡は字の大きさによって，また，Ｅの筆跡は，判別力はかなり落ちるようにみえるが，字の力強さや活字風の角張った感じによって説明されるように思われる。それに対し，Ｚの筆跡は，その構成要素が多様なためか，少数の因子ではなかなか説明できないようである。しかし，一部の例外を除き，各変量のコミュナリティはかなり高く，このデータは日本人の日本語の筆跡が概ね３〜５因子で説明可能なことを物語っているように思われる。

実　験　I—2

目　的

筆跡とパーソナリティとの関連を質的に検証する。

刺　激

評定者の作業量の限界も考慮して，実験Ｉ—１で用いられた刺激の中から，表１の各筆跡類型に典型的なもの各々２ケースずつ，計60刺激を選択して，実験に使用した。

手続き

ランダムな順に並べられた60ケースの筆跡それぞれに関して，大学生を主とする30名の評定者に，純粋に筆跡それ自体から受ける印象を，形態的印象（たとえば，大きい，筆圧弱いなど）と，情緒的印象（たとえば，無気力，明るいなど）の２種に分けて，各々別紙に，思いついただけ自由に箇条書きの形で記述させた。

結　果

各評定者は，１つの筆跡に関して，概ね２〜10個の形態的印象と，２〜10数個の情緒的印象を記述した。収集された印象は，形態に関して900余り，情緒に関して1600余りに及んだ。これらの印象を，内容分析の一技法であるＫＪ法(川喜田，1967)を用いて処理して行く方法と，各々の印象の各筆跡ごとの度数，筆跡間の度数の分散あるいは変異係数を検討して行く方法とを重ねあわせながら整理し，最終的には，２種の印象を合わせて122項目よりなる筆跡特徴記述のための基準書を作製した。

各々の筆跡に関しては，形態，情緒それぞれの印象を，基準書に記された項目に再編成し，その度数とともに，図１に示されているようなパタンカードに上位５位まで書き出した。一部，２種のパタンカードに同一の項目が記されている場合もあるが，これは評定者の自然な印象をそのまま尊重することが大切であると考え，基準書においても，パタンカードにおいても，そのままの形を残すことにしたものである。作製されたパタンカードは実験Ｉ—１で抽出された因子を推定する際にも用いられ，かなりの効果を発揮した。

また，筆跡全体の特徴を記述するための試みとしては，上記基準書の諸項目をさらにＫＪ法や出現度数の変異係数などを用いて整理し，表２に示された，71項目よりなる大チェックリストを作製した。現段階の内容分析の結果では，少くとも表２の大チェックリストに記された71項目の印象の有無を判断すれば，日本人の日本語の筆跡のすべての特徴を把握することが可能になると思われる。

考　察

すでに述べたように，ＳＣＴの反応の筆跡は，それ自体によって書き手の性格類型を診断できる点，従ってそのままの形で平易に，新しいパーソナリティ診断法として実用可能な点，さらに書き手がテストの内容に注意を向けるためか，書字行動自体には表出的要素が強くにじみ出る点など，筆跡研究のための刺激材料として有力な利点をもっている。しかし，同時に，厳密な実験的研究に使用する場合には注意しなければならない問題点として，たとえばごく稀なケースではあったが，実験Ｉ—２で評定者に記述させた印象の中に，ＳＣＴの内容を読まなければ恐らく出てこないだろうと思われる「反動形成」などという項目がみられたことなどがあげられる。このような点は今後の実験においても，必ず留意すべき課題であるように思われる。

実験Ｉ—１では，すべての筆跡が概ね５つ以内の因子によって説明可能なことが明らかとなった。町野(1978)は，筆跡学と彼自身の研究結果から得られた経験的知識をまとめ，「筆跡による性格判断のための６つのポイント」として，①大きさ，②形，③角度，④異常変化，⑤書字速度（筆勢），⑥筆圧，をあげている。これらはいずれも我々の「形態的印象」にあたるものである。性格診断に必要な筆跡特徴は，実験Ｉ—１の結果から示唆されるように，多少とも情緒的特徴を含む５つ以内の因子なのか，それとも，町野（1978）の主張しているように６つの形態的特徴なのか，それは，実験Ｉ—２で得られた71項目の筆跡特徴項目の検討とあわせて，次に行なわれる実験の課題であるように思われる。

表 2　大チェックリスト

Aグループ（形態的特徴）		
筆圧が強い	漢字の大きいのが目立つ	つづけ字あり
筆圧が弱い	右肩上がり	くずしている所が多い
筆圧が一定	右肩下がり	字と字がくっついている
筆圧が一定していない	太い線	ふぞろい
筆圧にリズムがある	細い線	そろっている
終筆部の筆圧が強い	角張っている	行を無視
書速がはやい	丸味がある	縦の線が大げさ
書速がおそい	横長の字	ハネが大げさ
字が大きい	縦長の字	
字が小さい	略字が多い	
Bグループ（情緒的特徴）		
おとなしい	さっぱりしている	神経質
無気力	几帳面	気が小さい
素　直	おしつけがましい	
明るい	自信家	
Cグループ（両方の特徴を含んでいるもの）		
きれい	大らか	雑
きたない	単　純	いいかげん
感じが良い	勢いがある	繊　細
感じが悪い	力強い	こじんまり
読みにくい	ていねい	こせこせしている
おもしろみがない	きちんとしている	弱々しい
くせがある	しっかりしている	クネクネ
くせがない	書き慣れた字	いじけている
かたい	書きなぐり	ユーモラス
やわらかい	ゴチャゴチャ	子供っぽい
のびのび	乱れている	気どっている

（便宜的にA～Cグループに分けられているが，その区分は厳密なものではない。）

註

1) 本研究は昭和54～55年度科学研究費補助金（一般研究(C)；451030）による研究である。
尚，本研究の発表にあたって，宮本吉朗君，川島真君をはじめ，槇田ゼミナール所属の学生諸君の御協力に対して謝意を表します。

2) 一連の筆跡研究のレヴューとしては，Sonnemann (1950), Fluckiger ら (1961), 黒田 (1964, 1980) を参照されたい。
また，Rohracher (1956) には筆跡についても詳しく記述されている。
さらに，筆跡学に対する批判は乾 (1936, 1960) に詳しい。

REFERENCES

Allport, G. W. 1961 Pattern and Growth in Personality. New York: Holt. (今田恵訳 1968 人格心理学　誠信書房)

Allport, G. W., and Vernon, P. E. 1933 Studies in Expressive Movement. New York: Macmillan.

Crépieux-Jamin, J. 1885 Traite Pratique de Graphologie. Paris: Flammarion.

Enke, W. 1930 Handschrift und Charakter. *Klinische Wochenschrift*, Teil 2, 1624-1627.

Fluckiger, F. A., Tripp, C. A., and Weinberg, G. H. 1961 A review of experimental research in graphology, 1933-1960. *Perceptual and Motor*

Skills, 12, 67-90.

Hull, C. L., and Montgomery, R. P. 1919 Experimental investigation of certain alleged relation and handwriting. *Psychological Review*, 26, 63-74.

乾 孝 1936 書相学の実験的批判 心理学研究, 11, No. 1.

乾 孝 1960 性格診断の技術. 戸川・正木ら (編) 性格心理学講座3 金子書房 pp. 273-288.

金沢良光・今村義正ら 1958 FHA式筆圧測定器の基礎的研究 科学警察研究所報告, 42, 177-183.

川喜多二郎 1967 発想法 中央公論社 (中公新書 136)

Klages, L. 1929 Handschrift und Charakter, 13 Aufl. Leipzig: Barth,

Kretschmer, E. 1925 Körperbau und Charakter. Berlin: Springer. (相場均訳 1960 体格と性格 文光堂)

呉 秀三 1892 精神病者の書態

黒田正典 1964 (1980 改訂) 書の心理 —筆跡心理学の発達と課題 誠信書房

黒田正典 1966 日本文字の筆跡心理学における基礎的研究 新潟大学教育学部教育心理学研究室

町野一晃 1978 筆跡人間学 —あなたの筆跡・あなたの性格 サンケイ出版

町田欣一 1961 筆跡による性格診断法 カッパブックス

町田欣一 1969 筆跡で性格がわかる本 —筆跡学入門 池田書店

町田欣一・今村義正 1960 文書・心理鑑識 (捜査・鑑識の科学3) 日本評論新社

町田欣一・山下富美代 1959 筆圧に関する基礎的研究 (1) 科学警察研究所報告, 47, 372-378.

町田欣一・山下富美代 1960 筆圧に関する基礎的研究 (2) 科学警察研究所報告, 50, 239-243.

松本亦太郎・増田惟茂・城戸幡太郎 1916 書及書方の研究

McNeil, E. B., and Blum, G. S. 1952 Handwriting and psycho-sexual dimensions of personality. *Journal of Projective Techniques*, 16, 476-484.

Michon, J. H. 1875 Système de Graphologie. Paris.

Middleton, W. C. 1939 The ability of untrained subjects to judge dominance from handwriting samples. *Psychological Review*, 3, 227-238.

三好 稔・小林利宣 1963 書字行動に関する類型学的研究(1) 広島大学教育学部紀要, 97-111.

村瀬聿男・三好 稔 1955 書字動作の人格心理学的研究 日本心理学会第19回大会

Preyer, W. 1894 Handschrift und Charakter. Deutsche Rundschau.

Rohracher, H. 1956 Kleine Charakterknude. Urban & Schwarzenberg. (宮本忠雄訳 1959 性格学入門 みすず書房)

佐野勝男・槇田 仁 1960 精研式文章完成法テスト解説 金子書房

Saudeck, R. 1925 Experimental Graphology. London.

Sonnemann. 1950 Handwriting Analysis as A Psychodiagnostic Tool: A study of general and clinical graphology. New York: Grune and Stratton.

Steinwachs, F. 1952 Die verfeinerte mechanische an Schriftwaage. *Arch. Psychiat. Z. Neurol.*, 187, 521-536.

谷山郷子 1979 筆圧曲線による性格タイプの類型化 行動計量学, 6, 2, 39-48.